



つ た え る

心をつたえる…様子をつたえる…事実をつたえる…

手立てをつたえる…気持ちを伝える

目次

[\[1\]2023 年度災害支援対策委員会](#)

[\[2\]安否訓練](#)

[\[3\]「災害現場における MSW の役割について～東京 DWAT の活動を通じて～」](#)

[\[4\]東京 MSW 号外](#)

[\[5\]東京 DWAT 派遣を経験して](#)

[\[6\]日本協会 1, 5 次避難所支援について](#)

[\[7\]2024年度災害支援対策委員会](#)

[\[8\]能登半島地震現地支援派遣協力都協会会員](#)

[\[9\]災害支援対策委員会募集案内](#)

[1] 2023年度災害支援対策委員会

富士川泰裕（康明会病院）

皆さんにとって2024年1月1日はどのような正月だったでしょうか？

家族団らんや、実家に帰郷、仕事をしていた会員もいたでしょう。

能登半島地震 2024年1月1日16時10分。自分、家族や周りの方々の携帯のアラーム音がけたたましく鳴り響き、楽しいはずだったテレビの正月番組ながれ、地震報道になりました。

今回の地震は、どうしても東日本大震災を想起されました。実施の被害も東日本大震災に次ぐ被害とも言われています。都協会災害支援対策委員会は東日本大震災を契機に立ち上げた委員会です。約13年間現地支援や研修を通して築き上げた経験を活かして行動に移しました。

発災からの都協会・日本協会の流れを時系列にしましたのでご確認ください。

1月1日 16:10頃 能登半島地震発生

16:30頃 東京MSW協会 災害支援対策委員 安否確認(グーグルフォーム試験運用)

22:50頃 東京MSW協会 石川県MSW協会員(前日本MSW協会理事)に連絡

1月4日 日本MSW協会 災害対策本部 立ち上げ

1月9日 日本MSW協会 募金活動開始

東京MSW協会 災害支援対策研修会「災害現場におけるMSWの役割について」

東京MSW協会 災害支援対策 臨時委員会

1)今後の動向確認と被災地支援への具体的支援について検討

2)都協会窓口担当者の決定と日本MSW協会との情報共有

3)支援金確保の協力のための窓口の周知

1月13日 東京DWAT 派遣可能日程確認メールあり。

1月15日 日本MSW協会 先遣隊 石川県訪問

1月18日 日本MSW協会

石川県知事より日本MSW協会に対し、避難所等への派遣要請。1.5次派遣登録開始。

1月22日 日本MSW協会 1.5次避難所にて活動開始(石川県MSW協会と協働)

1月26日 東京DWAT 2月中の派遣依頼ナシとの連絡を受け、日本MSW協会派遣登録。

2月3日 日本MSW協会 災害支援活動(1.5次避難所：いしかわ総合スポーツセンター)
都協会員は派遣第1号(2月3日～6日)

2月 東京MSW号外発行

2月 能登半島地震現地支援員募集チラシ発行

2月～4月 都協会1.5次現地支援員派遣

3月 東京DAWT派遣開始

[2] 安否確認訓練

～協会として会員の被災状況を確認し、支援ニーズを把握していく～

中辻康博（豊島区医師会）

災害支援対策委員会ではこれまでも SNS を活用した災害時の安否確認訓練を実施し、システムの構築を検討してきた。まだシステムの検討段階ということもあり、今回は Google フォームを使用し、対象者を都協会理事・事務局と災害支援対策委員に限定して、各自が被災状況を回答する形での安否確認訓練を実施した。訓練で実際に送った内容は以下の通りである（※枠内 URL より、実際の質問内容を確認可能）

【訓練内容】 3/15_15：00 発信

これは訓練です。実際の災害ではありません。

こちらは都協会災害支援対策委員会です。本日(3/15 金)14：30 頃、東京湾北部を震源地とする地震（マグニチュード 7.5）が発生致しました。

協会員の安否確認のため、以下の URL よりご回答をお願いいたします。

<https://forms.gle/p6P2bDMSND2ztkvS8>

これは訓練です。実際の災害ではありません。

【訓練結果】

3/16_14:30(発災 24 時間経過)時点 訓練対象者 30 名中 16 名回答 (安否不明 14 名)

3/17_14:30(発災 48 時間経過)時点 18 名回答 (安否不明 12 名)

今回、訓練(安否確認連絡の発信)のタイミングを事前に伝えなかったこと、また都協会活動で使用している医療介護専用 SNS でのアナウンスのみということあり、訓練の存在に気づかないメンバーも多くいたのが現状で、協会からの発信方法など課題を感じた。ただこれまでの訓練以上に具体的に会員の被災状況等を把握することができ、会員の安否だけでなく、支援ニーズ等も確認することができた。有事には平時からの準備・連携が活きると言われている。いつ起きるかわからない災害に備えて、会員の安否確認できる仕組みを構築し、全会員を対象に訓練・実活用できるよう早急に検討していきたい。

[3] 「災害現場における MSW の役割について～東京 DWAT の活動を通じて～」
に参加して

小菅英樹(若木原病院)

2024年1月9日に開催された災害研修の感想について述べたいと思います。

・・・とその前に、研修の題名にもなっている DWAT とは何かご存知でしょうか？
あらためて調べてみると DWAT とは

「Disaster (災害) Welfare (福祉) Assistance (支援) Team (チーム)」

の略で、災害派遣福祉チームと呼ばれています。ちなみに DMAT という組織もあり、こちらは「Disaster Medical (医療) Assistance Team」の略で、福祉ではなく医療を支援する災害派遣医療チームと呼ばれています。

専任で救助を行うレスキュー隊の様な組織ではなく、通常は病院等で働く MSW、看護師などの専門職が登録を行い、災害発生時には募集があり、派遣協力をするという組織です。現在、都道府県単位での創設が進められており、東京都には東京 DWAT があります。

では、DWAT の役割は何でしょうか？調べると、次のように書かれていました。

「災害時における長期避難者の生活機能の低下や要介護度の重度化など二次被害の防止のため一般避難所で災害時、要配慮者に対する福祉支援を行うこと」

少し聞き慣れない言葉も多いので説明をすると、一般避難所とは公民館や学校などの公共施設に設けられる避難場所のこと、要配慮者とは高齢者や障がい者、子どもなど特別な配慮を要する方を指します。

ですので、公民館や体育館などで避難生活をされている方に対して、福祉が必要な方を支援する。そんなイメージでしょうか。

具体的には、要配慮者へのアセスメントや相談支援、福祉避難所（老人福祉施設や障がい者支援施設などに設けられる避難所）への誘導などを行います。ですので、災害直後というよりは災害から少し時間が経過してから必要となることが多いようです。

そして、今回はその DWAT のアドバイザーをなさっている園崎先生が講師となり、様々なことを教えてくださいました。

研修では、様々な経験や考え、工夫や知恵を教わったのですが、その中で最も印象に残ったことは「被災者支援にあたって必要なことは、私たちが普段行っている対人援助と同じ」ということでした。

園崎先生は被災者支援を行うにあたって3つの原則があると言います。それは「被災者中心・地元主体・協働」です。支援の中で判断や決断をすべき時にはこの三原則を拠り所とすべき、と教えていただきました。

ということか、順番に説明をすると

「被災者中心」

専門職として支援に携わることになりますが「専門性をどう発揮するか」と支援者目線で考えるのではなく、被災者に求められるニーズを知り、そのために何ができるのか、と被災者中心に考える。専門性を発揮できない状況でも「こんなことのために支援に来たのではない」と考えるのではなく、誰のための支援なのか、という視点を忘れてはいけないとのこと。

「地元主体」

災害によって、災害以前からの地域課題が浮かび上がることがありますが、その課題に向き合うのは地元の方々であり、その人たちを支えるのが外部支援者の役割。支援者が解決しようとするのではなく、被災者をエンパワメントし、自立を促す支援をすべき、とのこと。

「協働」

被災地では様々な職種の方との協力が必要となります。そのためには、まず相手を知り、次に自分を知ってもらう。そして、役割を決めて協力しながら支援することが大事、とのこと。

どのようにすべきか迷ったときにはこの三原則に立ち返って判断し、行動することが大切だと語ります。それは被災者をクライアント、協働を多職種連携と考えるなら、私たちが日々行っている対人援助と本質的には変わらないように思うのです。

また、DWATは介護福祉士、社会福祉士、精神保健福祉士、保育士、介護支援専門員、看護師、リハビリ専門職などの福祉職で構成されるのですが、医療従事者との日常的な業務上のやり取りが少ない職種が多いので、医療的な視点も持ち、日常から関わることの多いMSWが医療職との間を取り持つことでスムーズな協力ができる。そんな貴重な役割を果たせる存在だということも、教えていただきました。

以上が研修に参加して印象に残ったお話です。

今回の研修は1月1日に起きた能登半島地震の直後に行われた研修です。講師の園崎先生は研修日にはすでに現地入りして支援を行っており、支援でお疲れの中、オンラインでご講義いただきました。本来、そんなときに行っていただくべきではなかったかも知れませんが、園崎先生のご厚意により開催させていただきました。この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

最後にDWATは、当協会でもたくさんの方が登録しています。興味がある方は是非、ご参加いただければと思います。

※追記) 以下、研修にあたって参加者からの質問に園崎先生が回答しておりますので、ご紹介いたします。

Q1) MSWとして、災害が起こる前に今から準備しておくべきことはありますか。

A1) やはり各地のDWATなどに登録をして、他の福祉専門職との研修会等の機会を得て、いざという時に向けての予備知識や心構え、県内関係者で少しでも顔の見える関係を作っておくことが大切かと思えます。

Q2) テレビでは現地に来ないで、物資も送らないでほしい、支援金を送ってと訴えていたが、本当はどうなのか。

A2) 物資をただ送るのは被災地に大変迷惑になります(物資は第2の災害とまで)。ただ、被災地の知人から求められ、それを手元まで届けることができるのなら、ぜひやるべきだと思います。何もできない人は仕方ないので支援金ということになりますが、現状ではなるべく現地に足を運ぶことの方が間違いなく役に立ちます。

Q3) 現地で支援者が涙を流してもよいのでしょうか。

A3) しっかり傾聴して共感することを行えば、涙が流れることはありますので、もちろんOKです。感情はコントロールできませんので。取り乱すようなことさえないようにすれば良いと思っています。

[4] 東京 MSW 号外



「2024年能登半島地震、当協会の初動」

会長 平田和広

まず初めに、このたびの能登半島地震で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。2024年は衝撃的な年始となりました。こんな年始を誰が想像することができたでしょうか。一年の計を立て、一家団欒で過ごし、友人や親せきと久しぶりの再会を楽しむ、そんな風に思い思いに過ごしていたであろう元日の16時10分頃、石川県能登地方を震源とする巨大地震が発生したのです。自然災害はどこでもどんなときでも起こりうると言われていますが、よりによって国民が新年を祝い、最も身も心も安心してきっていたであろう元日に巨大地震とは・・・きっと多くの方がそのように思ったことでしょう。

当協会の動きとしては、1月1日の夜間に災害支援対策委員会のメンバーで連絡を取り合い、昨年の全国大会の東京大会でお世話になった石川県 MSW 協会の方にお見舞いのメールを送りました。返信不要とお伝えしておりましたが、律儀にも翌日の1月2日に返事のメールを頂戴し、その内容からはまだ全容は分からないが金沢市より北の能登地方の被害が甚大な様子が見て取れ、この時すでに能登地方の被害を受けた地域から金沢市や小松市への広域搬送が始まっているとのことでした。何かお手伝いできることがあればご連絡下さいと返事をしつつ、次の動きとして臨時の災害支援対策委員会を1月9日に開催することとしました。

元々、1月9日の夜間に災害支援対策委員会主催の災害支援研修を予定しておりましたので、委員が集まるこのときに臨時で災害支援対策委員会を開催しました。研修会と臨時災害支援対策委員会の詳細は当協会ホームページに掲載されていますので（災害支援対策委員会・研修会報告1月11日掲載）そちらをご参照下さい。このときの委員会で3つの支援を決定し、今後想定される被災地の福祉避難所への会員の派遣の協力依頼があった場合の対応について1月20日の定期理事会において提案検討することとしました。

<1月9日の臨時災害支援対策委員会で決定した被災地支援>

- ①今後の動向を見て被災地（石川、新潟、富山、福井）へ具体的な支援を行う
- ②当協会の窓口担当者を災害支援対策委員長（康明会病院 富士川泰裕氏）と決定し、日本協会と情報の共有を図る
- ③支援金を募っている窓口を会員に知らせて支援金確保に協力する

その後、想定通り東京 DWAT と日本協会から被災地への会員の派遣の協力依頼がありまし

たのでホームページで会員へ周知するとともに、1月20日の定期理事会において被災地へ実際に赴く会員への支援としてこれまでの災害支援活動では交通費の援助を実施してきましたので、これまで同様、交通費を予備費から支出することを決定しました。

<1月20日の定期理事会において決定した被災地支援>

④協力依頼によって被災地の福祉避難所へ赴く会員への支援として交通費を支出する

以上、①～④が現時点で当協会が決定した被災地支援です。

当面の間、平時は隔月開催としていた災害支援対策委員会を毎月開催することにしていきます。関係者と情報を共有し、被災地のフェーズが移行していく中で、現地の方々のニーズに沿った支援を心掛け、被災地に赴く会員の後押しをしつつ、我々に何かできることはないかを知恵を絞って考えていきたいと思えます。会員の皆さんにも適宜、被災地支援関連の情報をお伝えするようにしたいと思います。皆さんからも被災地支援関連について何かご意見があれば遠慮なく事務局までご連絡下さい。本年もどうぞよろしくお願い致します。

[5] 東京 DWAT 派遣を経験して

拝啓、2011 年の君へ

山野晶（河北リハビリテーション病院）

2024 年 3 月 11 日、君は輪島市門前中学校の避難所で、東日本大震災の黙とうを捧げます。2011 年の君には考えられないと思いますが、ここにつながるのです。

2011 年 3 月 11 日、あの日は転職して 10 日ほど、定時を迎えると一目散に保育園に向かいました。週を開けて出勤した職場の状況から、SW なのに、君が君だけのことしか考えていなかったことを痛感しました。ずっとその後悔が残っていましたね。

2023 年、都協会の理事になり、社会問題対策部、災害支援委員会に所属。東京 DWAT が発足し、活動開始に向け 10 月に登録研修に参加。園崎先生の講義と支援体験を聞き、「被災者中心・地元主体・協働」の三原則に背筋が伸びる感覚を覚えました。11 月に日本協会主催、全国の医療ソーシャルワーカー協会災害担当意見交換会に参加。その時に、災害支援に取り組むことになったきっかけは「心が駆り立てられた」と表現をされていた方がいて、ずっと印象に残っていました。

2024 年 1 月、能登半島地震発生。次々に拡大する被災者、派遣される支援者をニュースやネット越しに追いかけて、気持ちばかり焦っていました。1 月 9 日、当協会主催の災害支援研修会で、園崎先生が金沢市に入り、そこから講演くださり、現地の悲痛な様子と、仕事として切り替えながら講師に取り組まれている姿に胸が痛みました。君はその時、相当駆り立てられていましたね。行かねば、行きたい！でもそれは誰の、何のために？自己満足？そんな迷いがあり、感情的に不安定でした。その後、東京 DWAT からの要請があり、恐る恐る職場と家族へ相談。どちらも「身の安全が確保されるなら」と了解を得られ、身を案じてくれたことがとても感慨深かったです。また、SW 部門の上司も背中を押してくれました。しかし、東京都は派遣に至らず見送り。日本協会の派遣が開始される中、君は支援をするなら、東京 DWAT として参加しようと決めていましたね。2 月に入り、3 月の派遣に向けて再要請があり、いよいよ派遣が具体的になる予感がしていました。都協会の災害支援委員のメンバーが日本協会での派遣に参加し、報告を受けて動きを把握していたことから、1 月に抱いていた感情よりは冷静になれていたと思います。メンバーの活動からも背中を押されました。そして、派遣が決定した際、災害対策委員長から、「東京 DWAT としては、都協会からの派遣第一号」だね、と声をかけられました。タイミングとしては第三クールでしたが、都協会としてはそういうことになるのか…。これまでの経緯から恐縮しかありませんでしたが、身の引き締まる思いでした。2011 年 2 歳だった子供は 14 歳になり「仮面ライダー 1 号みたいだね」「絶対に身も心も元気に帰ってくること！」と喝を入れてくれました。

東京 DWAT は MSW 以外の福祉職が多く、第三クールは子ども支援、障がい者支援領域の SW で医療分野の MSW は君だけでした。日本協会の活動を聞いていたので、東京 DWAT として出来ることをフラットに取り組もうと、事前の心構えができました。チームメンバーは君を入れて4名。リーダー以外は初参加。約1週間の同志です。富山県を拠点に、毎日二時間半 100km の一般道を往復して避難所に通いました。ちょうどフェーズが大きく変化するタイミングで、東京 DWAT の役割は、長期的な孤独死を防止するために、介護・福祉ニーズのアセスメントと避難者のマッピングでした。避難所は一般避難所のため自立している方が中心で、日中は仕事や自宅の片づけに外出される方が大半でした。また、各教室や大きな体育館に段ボールハウスが並べられ、集落ごとにまとまって過ごしていました。平均70歳前後ではありましたが、互助力が高く、要介護の方を集落の皆でケアしていました。生活自体が成り立っており、積極的に支援を求める環境ではありませんでした。そのため、東京 DWAT としては、避難者の方々のエンゲージメントに取り組みました。体調確認をはじめ、体操や炊き出しの声かけ、施設運営者への意見集約や伝達、未就学児との交流など、日々のちょっとしたことをつなぐことを通じて、避難者の方々にとって脅威ではないこと、話しやすい部外者であること、なんとなくあの人たちには話が通じるな、と感じていただくことに努めました。合間で、JRAT, JMAT, JHEART など、多くの支援団体と協働して動き、奈良県 DWAT と一緒に活動する期間もありました。専門性の違いはあっても、避難者の方々を支えたいという共通目標があるため、初めてでも、スポットでも不思議と連帯感があり、コミュニケーションが図れ、効果的な感覚がありました。避難者の方々も、少しずつ警戒が解かれ、一日二日経つと地域の特性、歴史、日々の不安、ご家族のことなど、色々と話してくださるようになり、「福祉の人」と覚えてくださいました。ちょうどその頃3月11日を迎え、黙とうを捧げました。

今回の災害支援では、支援期間が短く、現地の過酷な状況から支援者ができることが限定されており、無力感が強いという話を聞いていました。ライフラインは復旧しておらず、家屋の被害も甚大で手つかずの状況が続いており、物理的な支援という点では力不足でした。しかし、君が参加したフェーズとしては、被災者の方と DWAT がつながること、被災者の方々の想いを聴き、希望を次のクールや生活、未来へつなげることが役割だったのではないかと感じています。被災者の方々は、「苦しい中で今を生きている、(いつの時代も) 悲しみを避けて通れないけど、笑顔を見せて今を生きていこう」という歌詞の通り、今を力強く、一生懸命生きていました。

初体験ということもあり、職場、家族の理解と、都協会の理事、委員の皆様から本当にたくさん励ましとエールをいただきました。おかげで不安よりも心強さが大きく、現地でも俯瞰して取り組めたと振り返ります。ここに至れたことは、多くの方とのつながりと、プロセスの積み重ねだと実感しています。東京 DWAT を通じて、SW として支援に参加できた

ことに、この場を借りて感謝を伝えたいです。同時に、災害支援、東京 DWAT としてはスタートであることを肝に銘じて、これからも取り組み続けていきたいと思いをします。

2011 年の君へ

「自分とは何でどこへ向かうべきか、問い続ければ見えてくる。

人生の全てに意味があるから、恐れずにあなたの夢を育てて

Keep on believing」

引用: アンジェラ・アキ 手紙～拝啓 十五の君へ～ エピックレコードジャパン・2008.9.17
発売



〔6〕日本協会 1, 5 次避難所支援について

能登地震に～駆け付けられぬもどかしさを抱いて～

武山ゆかり（自宅会員）

元旦の午後、誰もがそれなりの新たな気分、家族の笑顔や幼い頃の思い出に、語りながら小さな幸せにくつろいでいた時に、大きな揺れがその全てを一瞬に奪い去った。テレビやスマホから流れる警報は、震源から遠く離れた地の私たちも小さくない揺れの中で、もしかしたらここも！と震撼させた。瞬時に、寒かった被災直後の阪神神戸の 1 月の夜を思い出させ、中越地震で駆け付けた長岡の崩れ落ちた街並み、古い茅葺や重い瓦ぶきの家々の連なりが目に浮かんだ。次々と報道される被災地への支援は、続く余震や分断された道路、使えない港湾施設と遅れの理由を繰り返すばかり。この寒さの中で、倒壊や火事で住まいを追われ、電気も水道も止まって、どんなに心細く、助けを待っているだろうか。

かつて、発災の翌日にバスを乗り継ぎ大きく迂回してたどり着いた中越の支援や、組織的支援の初動も早かった東日本大震災に、それなりの役割を果たせた十数年前と違って、今は日常にも支援される側になりつつある自らの体力や年齢を考えると、雪の舞うテレビの画面に唇を噛むしかなかった。被災地の医療福祉情報は、早々から共有され、支援の準備も若い後輩たちの間で進められ、支援の派遣への登録のフォーマットも、整えられた。DWAT に登録している SW も次々名乗りを上げている。今回は、遠くから「一刻も早い支援を」と願うことしかできないもどかしさの中に日を送っていた。

1 月 28 日に開催された石巻フォーラム～『東日本大震災被災者への 10 年間のソーシャルワーク支援』刊行記念集会で、現地支援経験者として話すことを要請された。会場は石巻日赤病院併設の災害医療センターであり、目の前から能登への車に乗り込む DMAT チームを横目で見ながら会場に入った。発災早々に被災地にも飛んでいた日本医療ソーシャルワーカー協会会長とも能登支援について話す機会が持てたので、出来ることがあればと声掛けしていた。数日を経ず、金沢市内の 1.5 次避難所での支援チームを支える現地責任者としての派遣に支援経験者として声が掛かった。1 週間ほどのアリーナ避難所の後、珠洲市での初動を依頼されていたが、体制が整わず最終日に日帰りで訪問挨拶にのみ入った。

何度かの被災地での支援は、どのような状況でも臨機応変に動くことを求められ、そこに合った働き方や休み方、気持ちの整理をつけながら支援目標を決め、助けがなくとも一定の

成果を上げるという多少難しいミッションであってもやり遂げる自信を経験させてくれた。

今回も、若い時と違って体力には不安もあったが、それなりの役割はあるだろうと求めに応じた。はじめて被災地支援を考える人は「どう動けばよいのだろうか?」「自分なんか役立つのだろうか?」「災害の現場を見たら足がすくむのではないか」等など、大きな不安に足が踏み出せずにいることもあるだろう。支援の場はこんなで、こんな仲間の支えもありますよ、という情報があれば、一步を踏み出せる人もいるであろうと、支援早々に「1.5次避難所いしかわスポーツセンターの1日」というレポートをMSW仲間に送信した。こんな風楽しく有意義に支援を進めているよ、あなたも早くおいで!というメッセージを送った。

現地責任者として、日々メンバーが新しく加わり、慣れたワーカーが職場に戻っていくままぐるしい中で、支援ケースを引き継ぎ、他職種と協働するばかりでなく、多職種と毎日開くミーティングで次々変わっていく支援体制や暫定的決めごとの更新、被災者のニーズ、支援側のニーズ、社会の動きなどに即応してMSWとして働ける条件を創っていく。1.5次避難所立上げから噛んでいる石川県MSW協会の理事 林さんが居るからこそ流れを止めずに次々と責任者が交代しながら支援は続けられているがほぼ2,3週毎に交代する当初は、誰もが状況把握だけでも2,3日を要する。会議と他職種からのオーダーに对应しているうちに1日が終わっていく目まぐるしさだが、その中で一つひとつ、整備され、深められていくことが重ねられていく。

幸いなことに、2月に入り感染症対策のエキスパートチームの働きが功を奏し、コロナやRA ウィルスによる感染症患者は減少していった。しかし、面接後にクライアントが有熱者であったことが判明したり、面前で嘔吐したりというケースにも関わり、不安を持ったMSWもいたという。しかしMSW協会が支援を開始してほぼ1と月は問題なく過ぎた。

就任2日目のことだった。女子寮となった2DKのマンションで、隣室の若いMSWは、ひとりが明日は職場に戻るから、と遅くまで楽しそうにおしゃべりしていた。こういう交流がいいのよね〜と私も幸せな気持ちで二人の話声を聞きながら眠りに落ちた。翌朝早くに洗面に立った私に、すまなさそうに「熱が出て喉が...」と今日帰る予定の彼女がマスク越しに...。持参していた消炎鎮痛剤を渡し、もうひと眠りさせ、近くの受診先を検索した。同室者は濃厚接触者として、業務を休ませ、付き添いとして受診させ検査も受けるよう指示した。結果はインフルエンザであったことが判明し、同室者にも予防薬が投与された。熱も下がっ

たとのことから、予定通り移動日として帰郷、一人で大丈夫とのことと同室者に金沢駅まで送ってもらい、夕刻無事帰りつきましたと連絡を貰い安堵した。同室者も発症することなく翌日には業務復帰した。

支援に入る MSW の健康を守ることや夜間発症時の対応物品や検査キットなどが供えられていなかったことについて、すぐに手立てをとった。

その他にも、1週間以上の長期滞在支援員は、合間に休みを取るようにとのことであったが、元気な MSW は「輪島まで行って災害現場を見て来たい」「珠洲市まで行きたい」と災害の実相を把握したい思いを持つ。私も実際には支援に入れなかった珠洲市まで行っておきたい、という思いは強かった。1.5次避難所の入所者が帰りたいという町の状況や距離感を掴んでおくことは、親身な相談や思いの共感に大きく影響することはわかるだけに理解できるが、その道のりは危険も伴う。こうした休日の遠出をどう位置付け、その際の道路事情などの事故があった場合の対応はどうするのか、なども管理側として考えておかなければならないことでは、と上申した。

石川県が管轄するいしかわスポーツセンターアリーナのメインとサブのホールにもう一つの区分の入所ブース、そして離れた敷地の産業展示場ホールを使った避難所に、医師、看護師、薬剤師、リハスタッフ、保健師、介護士、ケアマネージャー、栄養士、心理士、そして私たち MSW が各専門職団体から派遣され来ている。また DMAT, DWAT, DPAT, JRAT, ITDART, そして YMCA のスタッフ。また県の雇いあげた民間業者が搬送やロジスティック、ホテルとのマッチングや交渉などにあたり被災者支援を行っている。沢山の個性的な意欲に溢れる方達はその専門性を活かした支援を展開している中で、MSW さんは何をする人？と思う方も少なくない。DWAT のメンバーが元気に入所者の間を巡回し、心配事は？と声を掛けてもいるので福祉や介護のことはあの人たちが...と頼りにされている。

では仕事は無いかという、決してそうではない。多く寄せられる「受診調整」は、DMAT チームがいた時は医師間で直接電話がやり取りされ、移送の手配や付き添う家族の調整で済んだ。DMAT 撤退後はアリーナ内に設置された診療所医師の指示で受診先を探し予約等を取り付き添う手を確保調整する。先方の病院 MSW や連携室との連絡をし、迎いのタクシーの予約や時間、車いすの手配など細かな準備や送り出しのメモシートを作成し本人・カルテ控え・受付と迎が来た時に混乱しないような準備を確実にしておくなど。また受診・入院時など、診療情報提供書や残薬の持参など落ちが無いように...など気を配る。看護も介護

も混成・日替わりだったりするのでなかなか難しい。施設入所のための主治医意見書作成も日替わりの医師からは、普段見ていないんだから書けないよ、看護師もしかり。結果担当する職種は無く、MSW が、カルテから拾い、各職種を持って廻りながら記入をしたり書いてもらったりして、資料を付けて医師に回し完成へと運ぶことになったりもした。

いずれも過渡期や職種の増減により、最終的な入所者の利益のための動きをして繋いでいくことが MSW の業務となり、考えてみると医療機関や施設の中での動きと同じ働きをしている。

何をする人？と分からなくても、困ったときに確実に道を見つけて力を貸してくれることが、確実に伝わって行き、県の担当者も、その他の職種も「相談」に来ることが増えた。入所者全員のリストと今有る情報の共有が必要と箴言し、渋っていた全員カンファレンスもいずれ必要との理解に行きついている。「全員は無理」なのではなく、行き先が決まらず困っている人全員がカンファレンスを必要とし、行き先をみんなで考えて探すか作ることが必要なのだと説いたので。それは、東日本の支援で経験済みの仕事だったから。MSW の底力ですね。

もちろん、入所者向けには「MSW ってどんな人？」とのコラムを、オレンジビブスのイラスト付きで壁新聞に掲載してお知らせしたり、DWAT 内で、MSW の動きを認識してもらったりと、じわじわ知ってもらう工夫はきめ細かくして来たので、県の最後の頼りとするところは、ここなのでしょうと思っています。何より、毎日複数の MSW をアリーナに配置している、県内事情に強い石川県 SW 協会のネットワークの力がものを言うでしょう。私たちはその準備とお手伝いだけです。壊滅的な被害の地域がある能登半島と、新幹線開業に湧く金沢以南と、所属する医療機関により業務や日常に大きな違いはあるとは思いますが、日ごろ一緒に教育や研修に力を合わせていた石川県内の MSW は、やはり県外からの支援を有難く、うれしく思っていることが伝わります。それに「今度は私たちが支援に」と、駆付けた福島や岩手や熊本の MSW が何より頼もしく「熱い仲間」がいることを感じているでしょう。MSW ってそういう人たちです。

日々、避難所終息に向けて、協議や交渉が施設や地域に向けて行われている。仮設住宅も少しずつ建設戸数が増えてきている。私たちの 1.5 次避難所での仕事はそう遠くない日程で終わるだろう。でも、あの時、相談出来て良かった、と後で思い出して欲しい。力になれてよかった、と何年か後で、冷たい風をきっかけに思い出したい。



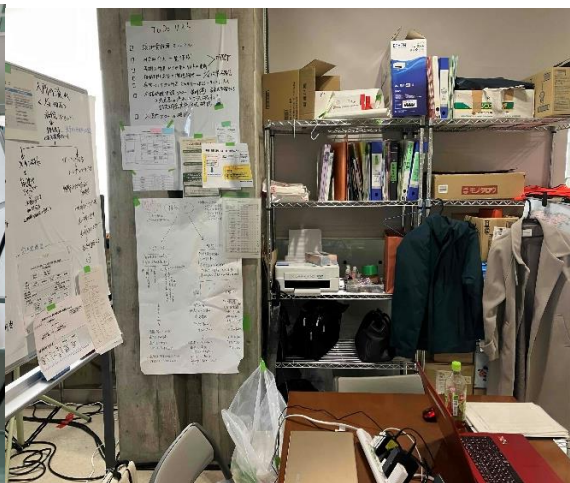
メインアリーナ



マルチアリーナ



段ボールベッド



MSW 事務所

[7] 2024年度災害支援対策委員会

富士川泰裕（康明会病院）

1月1日能登半島地震、4月3日台湾地震、沖縄津波報道、4月17日愛媛県地区の豊後水道地震。今年は地震被害が続いています。

私たち医療ソーシャルワーカーは、普段の業務はもちろん災害が起きて時に普段身に着けているソーシャルワークを活かして被災者を救うのも使命だと思います。自分の組織だけで収まらず、いざという時は、自分自身になりが出来るか試してみませんか？

その時のために災害支援対策委員会は、常時から力を蓄えるために活動しています。2024年度の災害支援対策委員会は、防災訓練・研修もしくはワークショップ・マニュアル改定です。小さいところから、日々活動して次なる災害に備えましょう。一緒に委員会に参加してくれるメンバー常に募集中です。

**[8] 2024年能登半島地震現地支援都派遣協力都協会会員 スペシャルサンクス
2024年4月時点 現地派遣時系列順（派遣予定も含む）**

中辻康博 豊島区医師会

いしかわ総合スポーツセンター 2月3日～6日（日本協会）

武山ゆかり 自宅会員

いしかわ総合スポーツセンター 2月17日～3月1日（日本協会）

富士川泰裕 康明会病院

いしかわ総合スポーツセンター 2月22日～25日（日本協会）

山野晶 河北リハビリテーション病院

輪島市門前中学校 3月8日～13日（東京DWA T）

金山真子 東京医科大学八王子医療センター

輪島市ふれあい健康センター 3月16日～21日（東京DWA T）

加藤淳 牧田リハビリテーション病院

輪島市諸岡公民館 3月20日～3月25日（東京DWA T）

安仁屋衣子 厚生年金病院

いしかわ総合スポーツセンター4月8日～13（日本協会）

平林朋子 介護老人保健施設ソピア御殿山

いしかわ総合スポーツセンター4月12日～18日（日本協会）

工藤麻希 佐々総合病院

いしかわ総合スポーツセンター4月13日～17日（日本協会）

ビンガム祥子 虎ノ門病院分院

いしかわ総合スポーツセンター4月28日～5月2日（日本協会）

武山ゆかり 自宅会員

いしかわ総合スポーツセンター 5月3日～5月10日（日本協会）

伊藤正一 勇美記念財団

いしかわ総合スポーツセンター 5月23日～5月27日（日本協会）

東京都医療ソーシャルワーカー協会



災害支援対策 委員募集!

「決して忘れないこと 伝えてゆくこと 続けてゆくこと」

災害支援対策委員会を発足し、災害支援、減災・防災対策を継続しています。今後も、1人でも多くの医療ソーシャルワーカーの力が必要となります。都協会の会員として一緒に災害支援について考えていきませんか？

募集対象

東京都医療ソーシャルワーカー協会会員

活動内容

委員会（2か月に1回程度）・研修会・交流会等委員で活動内容を企画・立案できます。

応募方法

下記のアドレスの件名に「災害支援対策委員会参加申込」として氏名・所属・連絡先を記入してメールしてください。

問い合わせ先：東京都医療ソーシャルワーカー協会

Mail : tokyo-msw@tokyo-msw.com

「つたえる」では、会員の皆様に災害支援活動について関心を持っていただくために、様々な委員会活動を報告させて頂いております。宜しければ以下の二次元コードもしくは URL より読んだ感想や意見などをいただくと幸いです。

感想や意見は委員の励みともなりますし、今後の活動についてのヒントともなります。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

(募集期限 令和6年12月31日)

<https://forms.gle/jsqLZKCWiqZgpCdR7>

